

8月20日～8月27日まで本校の生徒5名(SGグループLABO4)はタイの北方に位置するチェンライ県の山岳少数民族の村でボランティアワークキャンプを行います。「途上国女性の社会進出課題」をテーマに、これまでの成果を踏まえ、研究を深めてまいります。この研修は「チェンライ風の学校ボランティアワークキャンプ」と名付けられており、本年度で4回目の実施となります。昭和女子大学の22名の学生と共に活動します。

■ ■ ■ 羽田空港からタイ・チェンライ県へ



[ミラー財団入口]



[オリエンテーション&講義]



[明日からのボランティア活動の準備]

■ 1日目 研修拠点となる「ミラー財団」に到着しました。

東京を出発し、タイのバンコクで国内線に乗り換え空港チェンライ空港へ向かいました。タイとミャンマーの国境付近には数十を超える山岳少数民族が生活しています。タイ政府によって低地に強制移住させられたこれらの人々の生活には解決すべき課題がいくつもあります。

☆【私たちの研修拠点であるミラー財団について】

「ミラー財団」は山岳少数民族の支援に、長い歴史と実績を持つタイ人によるNGOです。

タイ社会のマイノリティである山地民が、偏見や差別に遭うことなく低地民と共生できる社会をつくることを目的としています。山地民の生活の向上と文化・伝統の継承をサポートする活動を行っています。

チェンライの町から車で数十分離れた所に活動拠点があり「ミラー村」と呼ばれています。広い敷地内に事務局のオフィス、研修センター、ボランティア宿泊施設、食堂、女性のための職業訓練所、フェアトレードショップがあります。建物は殆どが手作りです。畑や田んぼでは無農薬のコメやパイナップル、バナナを栽培したり豚や鶏も飼っていたりして自給自足に近い生活を送るようになっていました。私たちもアカ族の村に宿泊する時以外は、ここに宿泊します。この辺りはお風呂に入る習慣がなく、水のシャワーがあるだけです。水温が低く氷のような冷たさの水を浴びるのには少し勇気が必要です。

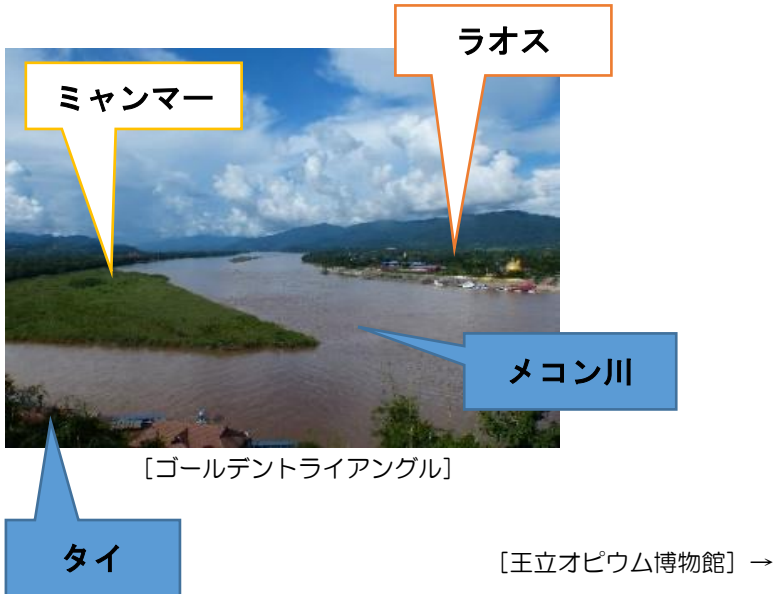
■ 2日目は「ミラー財団」で学びを深めました。

午前中は、山岳少数民族の現在置かれている状況や問題点についての講義をスタッフの方から受けました。昨年までは負の部分の話が多かったのですが、今年はグローバル化による利点についての話もあり、彼らを取り巻く状況も変化しつつあるという印象を受けました。

午後から夜にかけては、明日から始まるボランティア活動の準備とタイ語・アカ語のレッスンをしました。



■ ■ ■ ゴールドトライアングル 王立オピウム（アヘン）博物館



[ゴールドトライアングルを望む丘の上で]



■ 3日目は国境の町メーサイを訪れました。

丘の上からタイ・ミャンマー・ラオスの3カ国がメコン川を挟んで隣接している様子を見渡すことができます。この場所はゴールドトライアングルと呼ばれ、かつてはアヘンの一大生産地でした。近くに王立オピウム博物館があり、この地のアヘンとの関わりやその恐ろしさを近代的で分かりやすい展示で学べるようになっています。1980年代からタイ国軍や王室が中心となり、アヘン栽培の撲滅運動を続けた結果、現在タイ側でのアヘンの栽培は殆ど行われていません。しかし国境近辺での流通は現在も続いており、安価に入手できるためにアヘン中毒の様々な形の害毒が子供たちに及んでいるという実情があります。

■ ■ ■ 児童養護施設訪問とボランティア活動



[大勢の子どもたちに迎えられて]

■ 3日目午後 児童養護施設を訪問しました。

午後にはクルーナム財団が運営する子どもの家を訪問しました。この施設ではストリートチルドレンが共同生活をしています。子どもたちはここで自立への道を探ります。

私たちはここで子どもたちと一緒にゲームをしたり紙ランタン作りを行いました。

この施設の子どもたちはとても元気で笑顔を見せてくれていましたが、実際は孤児であったり、人身売買や売春の被害にあたりアヘンを覚えしまったりと、日本では考えられないような境遇に身をおいている子どもたちばかりです。無国籍の子どもも多く、教育や就職、国内の移動さえも制限がありとても過酷な状況に置かれています。施設の先生から何うお話は衝撃的ではありませんが、改めて私たちに何ができるのか考えさせられます。

